

ジャーナリストやなぎはらみか
柳原二佳

新交通事故 ホームズの 事件簿 4

短期連載

友人たちの目の前で事故は起こり、バイクの若者が命を失った。相手の乗用車は現場から逃走した。明らかに相手側が悪いのに、なぜか警察の初動捜査では、若者のほうに過失があったとされてしまう。両親や友人たちの執念の追及、そして交通事故鑑定人・駒沢幹也氏(全)の緻密な鑑定が、警察のずさんな捜査を暴いていく――。

一九九一年三月二十六日午後十一時ごろ、茨城県××市の二道――。

友人四人とボウリングを楽しんだ古物商手伝い、石浜仁さん(当時二十歳)は、四〇〇CCのバイクにまたがって家路についた。すぐ後ろには友人たちの乗った乗用車が一台続いていた。途中、バイクも車もそろって赤信号で停止。青に変わって発進した直後に、異変は起こった。後ろの車の助手席に乗っていた友人の油原修文さんはその瞬間をこう語る。

「ちょうど緩やかな左カーブにさしかかったときでした。前を走っていたバイクのブレーキランプが突然光ったのです。コーナリーの途中でなぜ急ブレーキなんかかけるのか、僕は一瞬、不思議に思いました。仁君は、モトクロスの全日本のレースに出場するぐらい、バイクの運転技術は優れていたし、普段の彼ならそんなむちゃな運転はしないはずでした」

次の瞬間、油原さんの目には、高く

飛び上がった仁さんの体と左右に蛇行する対向車のライトが映った。

・(仁君が事故った！)

すぐに車を止め、友人たちは路上に倒れていた仁さんに駆け寄った。右手からかなりの血が流れている。油原さんは、そのとき、とっさに対向車のドライバーを捜したという。

「苦しそうな仁君を見ていて、とても動揺しました。いったい相手は何をしているんだ？ あたりを見回しましたが、それらしき人も車もいません。とっさに僕は『ひき逃げだ！』と確信しました。仁君はセンターラインを越えてきた対向車と接触した。僕にはそうとしか思えませんでした」

一九番通報をしてくれたのは、現場に面したアパートの住人だった。仁さんは救急車で病院に運ばれ、仁さんの両親の明夫さんと照子さんが駆けつけた。照子さんは言う。

「仁はまだ意識があり、私が『仁、どうしたの？』と聞くと、『うん、うん、うん』と答えました。でも、大きく腫れたおなかと口から流れ出す血を見た主人は、『仁は死んでしまうかもしれないぞ、覚悟しておけ』と私に言いました。痛みは強く、五人で体を押さえても押さえきれないほど。死の苦しみとはこういうものかと思えました。やっと二十歳になったばかりだと

石浜さん夫妻（後ろ姿）が保存していた2台の事故車を照合して鑑定する駒沢幹也氏（カメラを下けている）



「……。私は祈りました。どうか助けてください、命だけはと」
しかし、仁さんは事故から約一時間半後、息を引き取った。死因は内臓破裂だった。

「僕は、今にも起き出しそうな仁君の類に触れてみると、その冷たさに涙がこみ上げてきました。しばらくして廊下のほうから、「どうなってるんだよ」という仁君のお父さんの声と、「ちよっと触れただけです。あとはカーブでわかりませんでした」という男性の声の聞こえてきました。事故の相

家族愛と友情が暴いた 警察のずさんな捜査

手が警官と一緒に病院に来ていたのです。いまごろになってノコノコ出てきて、何考えてるんだ、バカヤロー、僕は叫んでやりたかった。事故を起こしたら、すぐにケガ人を助けるのが運転者の義務じゃないですか」

油原さんは、病院で初めて事故の相手を見たときの怒りをそう語った。
四十代半ばの男性だった。彼はただ下を向き、横では妻らしき人が「すみません、すみません」と泣きながら詫言っていた。仁さんの両親や友人たちも、それ以上のことは言えなかった。

「それからは、ただ通夜、葬儀の準備にあわたたしく動き回るだけ。警察のほうからは特に事故の説明はなく、加害者のことについても詳しく聞く余裕などありませんでした」

そんな石浜さん夫妻が、事故の内容について知ったのは、葬儀の朝に見せられた新聞によってだった。この事故が以下のように書かれていた。

△……石浜仁さん(30)のオートバイと、前から来た会社員Pさんの乗用車が正面衝突。石浜さんは腹を強く打ってまもなく死亡した。××署の調べでは、石浜さんがスピードを出しすぎていたため、ハンドル操作を誤って対向車線に飛び出したらしい……▽

それは、仁さんの一方的な過失を伝えるものだった。

えるものだった。

しかし、事故の瞬間を目撃した油原さんや、ブレーキ痕などを計測した明夫さんは納得できなかった。現場には、バイクのものと見られる約十センチのブレーキ痕だけがはっきり残っていた。仁さんは、事前に危険を感じて急制動をかけていたはずだ。それに、事故車や衣類などの証拠品、油原さんの目撃証言があるにもかかわらず、なぜか警察はそれらをまったく調べようとしなかった。石浜さん夫妻が警察から初めて呼び出されたのは、事故から一カ月後のことだった。

「仁さんの当時の健康状態などを聞きたい」

というのがその理由である。ひと通りの調べが終わったとき、担当の警官は軽い口調でこう言った。

「実は、Pは酒気帯び運転だったんだ」

「えっ……」

石浜さん夫妻は驚いた。

「いったい、どのくらい飲んでたんですか？」

「ちよっとね、ちよっとね、と言ってたけど、まあ今からじゃ本当のことは言わないだろうな。ちゃんと話せたら、少しのおい程度なら、べつに検知しなくてもいいんだよ」

その警官の言葉に納得できなかった



眞実追求のために100回以上も現場に通ったという石浜明夫さん(右から3人目)、照子さん(左端) 夫妻と、仁さんの友人たち

石浜さん夫妻は数日後、茨城県警本部の監察課に電話をかけた。警察内部の不祥事などを調べる部署で、裁判所の書記官が「一度相談するといいい」と教えてくれたのだった。そして、

①死亡事故であるにもかかわらずP氏の飲酒を検知していなかったこと

②飲酒の事実を知りながら逮捕も拘置もなかったこと

③事故の目撃者への事情聴取がおこ

なわれていないこと

などについて担当官に相談した。

すると、相談した効果があったのか、事故を目撃していた友人たちの事情聴取が始まった。数日後、石浜さん夫妻はX署から再び呼び出され、課長と名乗る人物と対面した。彼は低姿勢でこう話し始めた。

「次々と大きな事件が発生し、仁さんの事故の捜査に時間がかかって申し訳ありませんでした。とりあえず、今日はこれをお持ちしましたので」

課長が真新しい封筒から取り出したのは、なんと飲酒の検知管だった。

「石浜さんは、私どもがP氏の酒量を検知していないと思っていられましたが、このとおりちゃんと検知してありますので、ご確認ください」

石浜さん夫妻は一瞬、狐につままれたような気がした。その足で、「検知しなかった」と言った担当の警官のもとに出向き、問い詰める、彼ははき捨てるようにこう答えた。

「そんなこと、言った覚えはねえよ、まあ、いいさ。どうせ、おれ一人が責任をとればいいんだから」

私が聞いた交通事故に詳しい弁護士の話では、警察が証拠を隠滅したり、捏造したりすることは、そう珍しいことではないという。もちろん、この検知管が捏造されたものだという証拠は

どこにもない。しかし現場検証をした警官が、一度は「検知しなかった」と言っていた検知管が、なぜ後になって出てくるのか? その謎は現在も残ったままである。

その後、P氏は酒気帯び運転による道交法違反などで書類送検され、罰金五万円の略式命令を受けた。

◇

後から次々と明らかになる事実疑問を持った石浜さん夫妻は、事故から四カ月後、弁護士で紹介で交通事故鑑定人・駒沢幹也氏と会った。駒沢氏は、石浜さんの自宅で二台の事故車を検証したときのことを振り返る。

「とにかく、証拠が完璧に残されていたのには驚いたね。石浜さんは事故の眞実を明らかにするために、仁君のバイクや衣類はもちろん、相手の事故車まで買い取って、雨がかららないように大切に保管していたんだ。あらかじめ業者に頼み、スクラップに回されたところを押さえたんだそうだ。それだけじゃない。現場には数えきれないほど通い、実車を使っての実験もたびたび行っていた。その熱意には、本当に頭が下がる思いがしたよ」

目にするのがつらくて、早々と事故車を処分する遺族が多い。保存状態のよい双方の事故車を照合しながら鑑定を行えるなど、めったにないことだった。

た。数々の痕跡は駒沢氏のルーベを通して、その瞬間を克明に語り始めた。

「初めに接触した箇所は、車のバンパー右前角部とバイクのフロントホイールだ。この傷はバイクのクラッチレバーでこすられたもので、こっちは傷は仁君が着ていたジャンパーのファスナーの跡。形がピッタリ合うし、車の塗料もちゃんと残っているよ」

さらに駒沢氏は、現場に残った長さ約十センチのブレーキ痕の写真を分析し、バイクの動きを再現した。

「仁君は少なくとも一秒以上も前に、前方に危険を認め、急ブレーキをかけている。しかし後輪をロックさせた状態では駆動がかららず、ハンドルを切っても左へよけることができないので、とっさにブレーキを解除した。その瞬間に衝突が起こったんだ」

鑑定書には、ブレーキ痕とバイクの動きが順を追って描かれていた。「ブレーキ痕の先端は、急に左に曲がった状態で途切れている。つまり、仁君は最後の瞬間までブレーキとハンドルを使いながら、必死で迫りくる危険を避けようとしたんだね。」

警察はバイクが左を向いていたことに気づかなかつたため、単純に前輪が十センチほどセンターラインからはみ出していたと判断しようだが、どんなでもないよ。飛び出してきたのは車のほう

さ。衝突の角度などから、車はセンターラインから少なくとも一・五メートルはみ出してはいたはずだ。

それにしても、ほんの一瞬タイミングがずれていれば、仁君は間違いなく逃げきれたはずなのに……」

駒沢氏は悔しそうに語った。この鑑定結果を受け、石浜さん夫妻は、「事故の原因は息子にあったのではなく、乗用車を運転していたP氏の飲酒とわき見運転だった」

として、約七千万円の損害賠償を求める民事訴訟を起した。弁護士は駒沢氏の鑑定書を重要な証拠として、裁判所に提出したのだった。裁判は東京地裁で、二カ月一度のペースで進んでいった。駒沢氏はもちろん、事故を目撃した油原さんら友人たち、そして明夫さんも次々に証言台に立った。

P氏は、二回にわたる自分の証人尋問以外、法廷には一度も姿を見せなかったが、事故の前に焼酎を三杯飲んでいたこと、酒を飲んで事故を起こしたので怖くなり、現場からしばらく離れていたことなど、事故直後の実況見分調書になかった数々の事実を認めた。そして事故から五年後の今年三月、裁判官は石浜さんたちに向かって、「加害者の酒気帯び運転も、現場から一時的に姿を消したことも、誠意のなさも認めます。あなたたちの言い分をすべて認めます」と語り、P氏9、仁さん1という過失割合での和解を強く勧めてきた。全面的に仁さんのほうに過失があるとした、事故直後の警察見解とはほとんど逆の判断が示されたのだ。P氏の代理人の弁護士も、最後は深々と頭を下げたという。

石浜さんの代理人として事件を担当した木宮眞彦弁護士は語る。「私たちはP氏の過失は100%だったと思いますが、裁判所の強い勧告により10%譲歩する形で和解に応じることになりました。長くかかった裁判でしたが、駒沢氏に正しい鑑定をしていただき、結果的に加害者が自分の過失を認めたくなくて解決することができてよかったです。交通事故では、警察の初動捜査が民事にも大きく影響します。この事故の調書は、加害者側が何らかの働きかけをしたのでは？と疑いたくなるほど真実から遠い内容でした。命を奪われたうえ、遺族がこのような苦しみを受けることがないように、正しい捜査、正しい判断をお願いしたいですね」

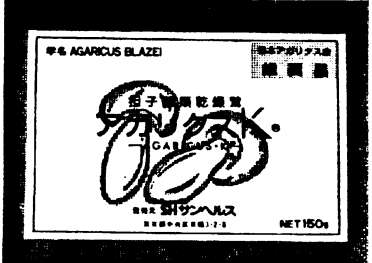
いま石浜さん夫妻は、自分たちの体験をもとに、同じような問題で苦しむ遺族の相談に少しずつ応じている。「警察のすきんな捜査のために、どれだけ多くの人が苦痛を味わい、人生を狂わされていることでしょうか。とくに若者のバイク事故は、偏った先入観で処理されているケースが多いような気がしてなりません。私たちと同じ苦しみを味わっている方がおられたら、事故車はもちろん、衣類、ヘルメット、道路についたブレーキ痕や擦過痕の写真などを大切に保管しておいてください。自分の手で証拠を押さえないと、時間とともにどんどん消えてしまいます。どうか真実を見つくるまで、あきらめないで頑張ってください」

この冬、石浜さん夫妻はガレージの中で大切に保管してきた仁さんのバイクを手放すことに決めた。あの事故から、もう六年がたとうとしている。(おわり)

今、注目の β-グルカン 最も多く含んだ キノコアガリクス

アガリクスK^R

アガリクスKは、静岡大学名誉教授・水野卓博士の指導のもとに、協和発酵グループ・CSバイオが生産したアガリクスを厳選し、煎じておいしく飲めるように仕上げてあります。また、アガリクスをフリーズドライ製法により微顆粒にしたアガリクスK原末もあります。



アガリクスK(150g)及び、原末(2g×60包)は、全国の有名薬局にあります。お問合せ、商品直送の場合は発売元へ。

発売元 SHサンヘルス
〒104 東京都中央区京橋 3-2-8
フリーダイヤル 0120(005)341
生産者 協和発酵グループ・CSバイオ